

# My Thesis (私の学位論文)

医歯薬学研究部 口腔保健教育学分野 伊賀弘起

- ① Iga H, Azuma M, Nagamine S, Kaji R, Takase M, Yanagawa T, Yoshida H, Sato M  
**Expression of neurofilaments in a neoplastic human salivary intercalated duct cell line or its derivatives and effect of nerve growth factor on the cellular proliferation and phenotype.**

Cancer Res. Vol. 49, No. 23, p.6708-p.6719, 1989 [本文へのリンク](#)

- ② 伊賀弘起

造腫瘍性ヒト唾液腺介在部導管細胞とその派生細胞における神経細胞の表現形質の発現と単純ヘルペスウイルス I 型の増殖動態

四国歯学会雑誌. 3 巻, 1 号, p.89-p.111, 1990 蔵本 1 階雑誌書庫(東)に所蔵あり

私は徳島大学歯学部の 1 期生として入学し、学部卒業後も大学院生として当時の歯学部口腔外科学第二講座佐藤光信教授（現・徳島大学名誉教授）に師事し、同講座の講師であった由良義明先生（現・大阪大学教授）の御指導のもとに「**口腔領域における単純ヘルペスウイルス感染症のメカニズムの解明と早期診断法の開発**」に関する研究に携わっておりました。諸般の事情で大学院を 1 年半で中退した後も、助教として同研究を継続しており、学位はこの研究で取得するものと勝手に想像しておりました。ところが突然、直属の指導者が長期海外留学のために渡米されることになり、そこから私の研究テーマは一変いたしました。すなわち当時、主任教授が進めておられた「**唾液腺腫瘍における分化誘導療法の開発**」に関する基礎的研究にシフトすることになったのです。本研究は唾液腺細胞の多分化能に着目し、それまで固形癌では報告のない「分化誘導療法」を開発するというもので、その内容の違いから戸惑いはありましたが、立ち止まることもできず、そこからは「造腫瘍性ヒト唾液腺介在部導管上皮細胞とその派生細胞」に対する分化誘導剤の影響を解析する毎日でした。その結果、これらの細胞を神経増殖因子存在下で培養すると、筋上皮細胞の表現形質を有する唾液腺細胞のみが神経細胞に分化し、その腫瘍性が減弱することを明らかにし、上記①に発表いたしました。しかし主任教授からは「論文博士として学位を取得するにはさらなる業績が必要」とのご指導を頂き、すでに取得していた単純ヘルペスウイルスを用いた解析結果を加えることによって①の神経細胞への分化をより明確にして②に発表し、論文博士（歯学）の学位取得に至ったものであります。大学院の中退、助教として臨床と研究の両立、指導者と研究テーマの突然の変更など、「My Thesis」の歴史は決して順風満帆ではありませんでした。ただ最初のウイルス研究のなかで学んだ種々の手法、すなわち培養細胞の継代と増殖能の解析、器官培養法、免疫染色法や蛍光抗体法あるいはウェスタンブロットによる表現形質の解析、電子顕微鏡による画像解析等々は、その後の研究においても不可欠なものばかりでありました。さらに私の様々な人生のターニングポイントにおいても良き指導者にも恵まれ、私の「My Thesis」の歴史はまさに幸運の賜物でありました。ちなみにその後も恵まれた環境のなかで研究に携わることができ、1997 年にはビタミン D 誘導体が前述の唾液腺細胞を骨芽細胞に分化させる分化誘導能を有していることを明らかにしたときの興奮は今でも忘れることができません([Cancer Letters. Vol. 115, p.149-p.160, 1997](#))。

研究は紆余曲折の連続です。そのなかには自分では気づかない幸運が必ずあります。今のあなたが感じているマイナス因子は将来必ずプラス因子となってあなたを救うに違いありません。今、学んでいることに無駄なことは何一つ無いと信じて研究生活を楽しんでください。